

夏の1日は長い。昼間の暑さから一変、夕暮れの気温の変化とともに虫の鳴き声が鳴り響き、思わず外出しなくなる。

河之内地区に流れる表川は西に重信川を望み、周辺には棚田や緑豊かな自然に囲まれる。昔ながらの日本を感じられる棚田一体の風景は「ほたるの里」と呼ばれ親しまれている。ほたるの里には毎年初夏に多くの蛍が輝きを見せ、自然豊かな場所で自由に行き交う蛍はたくさんの人を魅了する。近年は市内外から多くの人が蛍を見に訪れ、景色を目の前に感嘆の声を上げる。ほたるの里は今や市内で蛍鑑賞ができる観光スポットとなってきた。

「日本の古き良き風景を残したい」と発足した「雨滝ほたるの里を守る会」。毎年、地元の皆さんを中心に蛍が飛び始める5月中旬にほたるの里を整備する。

ほたるの里の整備は今年で12年目を迎えた。ほたるの里は人々にどんなことを残してきたのだろう。今月は、ほたるの里を整備する皆さん取材した。

Village of Firefly

特集・ほたるの里

— 棚田と風景 —



6



1

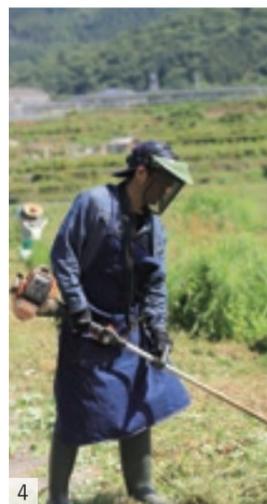


7

1_ほたるの里の整備に集まった皆さん／2_害獣対策の鉄柵を整備／3_ライトを組み立てる／4_伸びた草を刈る／5_整備が終わっても続く話し合い／6_ライトを運ぶ／7_整備場所を確認する



5



4



2



3

「棚田の整備をする中でほたるの里づくりが始まりました。来てもらうことでほたるの里のことを知ってもらい、ここで作られた米を食べてもらいたいと思っています。棚田を守りたいという農家の皆さんの思いが、ほたるの里づくりへと繋がりました。蛍の生息地を守ることで棚田を作ることとは切っても切り離せません」と坂本さんは話す。

を超える人がソーラーライトの設置や草刈りのほか鉄柵を整備した。雨滝ほたるの里の代表の菅野林次さんは「蛍が見れる時期に猪も里に降りてきます。鉄柵に竹や鉄パイプを巻き付けていましたが、それでも猪が壊してしまいましたが、毎年試行錯誤しています。害獣対策は、蛍を安全に見てもらえるために欠かせませんが、何より米農家にとって必要なことです」と菅野さんは話す。

蛍鑑賞ができる時期は棚田に苗を植える時期と重なる。毎年、河之内地区の棚田で作られている米は美味しさに定評がある。



雨滝ほたるの里を守る会 **坂本 憲俊** さん (河之内)

当初は10人ほどで整備をしていたほたるの里づくりですが、今では多くの人が整備に来てくれるようになりました。長く続けていると棚田のことを知る人も増えて嬉しい限りです。

私ができることは、ほたるの里を守っていくことと次に繋いでいくことだと思っています。これからほたるの里のファンの人が増えるように活動を続けていきたいと思っています。

光のない 棚田の夜を彩る

「雨滝ほたるの里を守る会」の坂本憲俊さんは「自然の中で多くの蛍が見れる場所は近年少なくなっています。この環境を守るべきだと感じています」と話す。ほたるの里はゲンジボタルやヘイケボタルが飛び、時期によって2種類の蛍が飛ぶ。蛍の放流などはせず、自然のままの蛍を見ることが出来る。こうした風景を見られるのは全国的には珍しい。

ほたるの里をつくるときのルールは「車は入れない」「光は最小限に」「蛍まつりはしない」

5月21日、今年も雨滝ほたるの里を守る会のメンバーや地元ボランティアなど30人

い。蛍まつりは蛍がする。「人が多く訪れるとライトや懐中電灯などたくさん光が照らされ、光に敏感な蛍の棲家を奪ってしまう恐れがあるので祭りは開催しないと当初から決めていました。農道に電灯を設置していますが、懐中電灯よりも光の弱いソーラーライトにしたり、川の側には置かないようにしたりなど蛍に配慮しています」と話す。



里を守る人

ほたるの里づくり 12年目。
ほたるの里を守る皆さんが思いを語る。

原田 隆^{たかし}さん 佐智子^{さちこ}さん
穰地^{じょうじ}くん 京澄^{けいと}ちゃん

南條 元気^{げんき}さん 裕美^{ひろみ}さん
心花^{ここな}さん 匠海^{たくみ}くん ゆかり^{ゆかり}さん
近藤 誠^{まこと}さん 高須賀 純^{じゆん}さん

貞廣 智之^{ともゆき}さん(横灘団地)

初めてほたるの里に来ました。子どもたちに自然に触れてほしいと思い来てみました。自分の住んでいる町とは違い、たくさんの生き物や自然が溢れています。子どもたちも積極的に手伝ってくれて、生き物なども見つけられて喜んでいたので嬉しかったです。ほたるの里のような自然がいっぱいあるところで子育てしてみたいと思いました。

毎年、南條工業では従業員の有志が整備に参加しています。地域の人たちにお世話になっているのでこのような形で地域に貢献できたらと思っています。

子どもたちが小さい頃から手伝いをしています。最近は、蛍を見に来る人がたくさんいます。子どもたちも、生き物に触れ合うことを楽しみにしています。

初めてほたるの里で蛍を見たとき、川と自分の周りに蛍が飛んでいてイルミネーションのような景色に胸を打たれました。同時に、景色を見るだけではなく、守っていききたいと思い、整備に参加するようになりました。

今もこのような風景が見れるのは、皆さんの風景への思いが形になっていることの表れだと感じます。

変わる人の流れ、変わらない景色



今年も5月下旬～6月上旬まで蛍鑑賞ができる予定。風のない日や温度が20度以上のときなど条件が揃うとより多くの蛍が見れると言われている。

ほたるの里に関わる人は年々変化する。地元の人はもちろん、ほたるの里づくりの活動に興味をもつ人、夜の景色に魅了されて昼の景色を見に訪れた親子連れ、風景の写真を撮りたい人など県内外から多くの人がほたるの里を訪れる。「地元の人たちの協力はもちろん、関わる人が増えてくるのはとても嬉しいことです。ほたるの里に来て

くれる人たちの喜ぶ顔を見ると私たちの励みになり感謝しています」と菅野さんは話す。
蛍が棚田を行き交う風景はどこか懐かしさを感じ、再度訪れる人も多い。「どこにもない世界一のほたるの里」としてこれからもさまざまな人の心を魅了する。ほたるの里は今もこれからも変わらない景色を私たちに見せてくれる。



雨滝ほたるの里を守る会
としひこ
中野 敏彦^{としひこ}さん(河之内)

昔から住んでいる私たちにとっては棚田や川の蛍は子どもの頃からあたり前の風景でした。あるとき、別の場所で蛍を見たときにほたるの里のよさに気づきました。ほたるの里では、川の上から下まで広範囲に蛍を見ることができます。蛍の放流などもしていないので、ありのままの蛍を見ることができます。草を刈るときも、見てもらえる人のためにと考えてしまいがちですが、蛍のためになっているかどうか考えることが大切だと感じます。今の時代にこれだけの風景が見れることに感謝しながら、整備したいです。



雨滝ほたるの里を守る会
りんじ
菅野 林次^{りんじ}さん(河之内)

毎年、ほたるの里の整備に地元の人も協力してもらいありがたく思っています。ほたるの里の整備には、年々多くの人が来てくれています。蛍を見るだけでなく、整備に来てもらえることは嬉しいですね。

今年も整備した5月21日あたりには既に蛍が飛んでいました。台風や大雨によって蛍が流れてしまったり、その逆もあつたりと毎年気候によって蛍の数に変動があります。蛍頼りなところもありますが、それもほたるの里のよさです。これからも整備を継続して続けていかなければならないと使命感を感じています。